

れたハチジョウカグマは従来小笠原諸島に記録のなかった種類である (本誌 46: 277)。ところがコモチシダ属のシダとしては、1848年 Kunze がオオカグマ *Woodwardia japonica* Sw. の父島産を Mertens no. 7 H. 54 の裸葉の標本をもとに報告している (in Bot. Zeit. 1848: 522)。従って、小笠原諸島にはコモチシダ属のシダが2種類あることになる。しかし、オオカグマについてはその後誰も本諸島で採集していないようである。また、植物地理上小笠原諸島と密接な関連をもつ琉球や伊豆諸島にもオオカグマは分布しておらず、この Kunze の報告には疑問の余地がある。他方、ハチジョウカグマの分布域は九州、四国をはじめ、琉球各島、伊豆諸島の青ヶ島、八丈島、御蔵島、三宅島、神津島、大島を含み、房総半島まで達している。小笠原産のシダで本種のほか琉球と伊豆諸島に共通に分布する種類の多くはマツバラシ、ユノミネシダ、ヘゴ、ケホシダ、コヒロハハナヤスリなどの広域分布種で、本諸島産シダのうち26種類あり全体の²⁶/₇₈、即ち約33%を占めている。上記の Mertens の標本をまだ検討できないので断言できないが、それはハチジョウカグマを誤認したものではないかという疑いを表明しておきたい。

採集されたハチジョウカグマの標本は2点で、いずれも葉長1m位あり羽片は羽状深裂し、裂片の先は細長くやゝ尾状にのびている。葉脈の網目も細かく、外部形態上既知の変異の域をはみだす性質はみられなかった。

Woodwardia orientalis Sw. var. *formosana* Rosenst. in Hedwig. 56: 334 (1914); Tagawa in Acta Phytotax. Geobot. 5: 174 (1925); Col. Illust. Jap. Pterid. 144 & 262 (1959); T. Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 46: 277 (1971).

‘*W. japonica* (L. f.) Sw.’—Kunze in Bot. Zeit. 1848: 552, versim.

Specimen examined: The Volcano Islands. Is. Kitaiwojima, alt. 200 m, ‘on bank along the stream’ (T. Yamazaki & K. Enomoto 316, TI).

(東京大学総合研究資料館植物部門)

○レンブクソウのイリドイド配糖体について (遠藤 徹) Tohru ENDO: On the iridoid glucoside of *Adoxa moschatellina* L.

レンブクソウ *Adoxa moschatellina* L. (Adoxaceae) は1科、1属、1種で合弁花亜綱、アカネ目に含まれる。最近、スイカズラ科、アカネ科等から数種のイリドイド配糖体が単離され、ケモタクソノミーの見知から二、三論議されている。¹⁾⁻³⁾

1970年東京近郊で採集したレンブクソウ 1.2 kg を生のまま粉碎してメタノールで冷浸し約 50 g のメタノールエキスを得、これを活性炭クロマトグラフィー、及びシリカゲルカラムクロマトグラフィーに付して 70 mg の無色粉末の粗配糖体を得た。これを常法通りアセチル化を行い、更にプレパラチブ薄層クロマトグラフィー (TLC) にて

精製し mp 149-152° の無色針晶を得た。これは TLC, 赤外線吸収スペクトル (IR), 核磁気共鳴吸収 (NMR) の検討の結果 *morrisoniside pentaacetate* と推測され、実際に標品との混融, IR の比較により同定された。

morrisoniside は三橋らにより *kingiside* と共にキンギンボクより初めて単離され¹⁾ その後、スイカズラ、サンシユユ⁴⁾、ハルリンドウ⁵⁾、オトコエシ⁶⁾ 等にも含まれている事が報告され、さらに又井上等によりその立体構造や生成成に関して検討され⁷⁾、イリドイド配糖体では分布が広いものと思われる。レンプクソウより *morrisoniside* が単離された事は、前記の科と近縁である事の一つの証明と思われる。

実験の部 1970年5月埼玉県飯能市附近で採集したレンプクソウの全草 1.2 kg をミキサーにて粉砕してメタノール 3 l にて2週間冷浸する。抽出液を減圧濃縮して、50g のメタノールエキスを得た。これに再び水を加え不溶物を沓別し、水層を減圧濃縮して 40 g のエキスを得た。これを活性炭 200 g を用いてカラムクロマトグラフィーを行ない、水にて糖部を溶出させた後、吸着部をメタノールにて溶出させ、溶出液を減圧濃縮し 3 g の粗配糖体部を得た。これを 70 g のシリカゲルを吸着剤としてカラムクロマトグラフィーに付し CHCl_3 -MeOH の系を用い順次 MeOH の濃度を高めながら展開し、3-3.5% MeOH- CHCl_3 より溶出してくる部分 70 mg を得た。これを常法通りピリジン、無水酢酸にてアセチル化し、プレパラチブ TLC (溶媒系: ベンゼン, エーテル=1:1, 厚さ: 0.75 mm, plate: HF²⁵⁴) 4 枚にて精製し、アルコールから再結晶し 63 mg の無色針晶を得た。mp 149-152。標品の *morrisoniside pentaacetate* と混融, IR で一致した。

なお材料の採集に御便宜下さいました当研究所 佐々木一郎氏に深謝いたします。

文献 1) I. Souzu and H. Mitsuhashi: *Tetrahedron Letters* 2347 (1969). 2) H. Inouye, S. Saito, H. Taguchi and T. Endo: *Tetrahedron Letters* 2347 (1969). 3) J. H. Wieffering: *Phytochemistry* 1053 (1966). 4) 遠藤 徹, 田口平八郎: *薬学雑誌* 93: 30 (1973). 5) 井上博之, 中村有伸: *薬学雑誌* 91: 755 (1971). 6) 田口平八郎, 横川ゆり子, 遠藤 徹: *薬学雑誌* 93: 607 (1973). 7) H. Inouye, S. Tobita, Y. Akiyama, K. Ito and T. Shingu: *Chem. Pharm. Bull.* 21: 846 (1973). (津村研究所)

□植物学報 中国植物学会の雑誌, 植物学報 15 卷 1 号が復刊された。蔣英氏がガガイモ科とトウダイグサ科の新属をかいている。またヒマラヤのチベット側や雲南の第 3 紀末の植物化石の中で、現在ヒマラヤの常緑広葉樹林の一つを代表する *Quercus semicarpifolia* が発見されたことは、植物地理上面白い報告である。最近、中国高等植物図鑑の出版など研究が活発になっていたが、本格的な論文が発表されるようになったのは喜ばしい。(山崎 敬)